

『ドクター・フー』と『スタートレック』における  
全体主義への恐怖の表象  
-CybermenとBorgのイメージ形成の歴史的背景-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 夢秋 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22215">http://hdl.handle.net/10291/22215</a>

# 『ドクター・フー』と『スタートレック』における 全体主義への恐怖の表象

——Cybermen と Borg のイメージ形成の歴史的背景——

## The Representation of Thrive to Totalitarianism of *Doctor Who and Star Trek*:

How were the Images of Cybermen and Borg made up?

博士後期課程 教養デザイン専攻 2019 年度入学

李 夢 秋

Li Mengqiu

### 【論文要旨】

イギリスの『ドクター・フー』とアメリカの『スタートレック』は、冷戦時代の 1960 年代に放送が開始され現在までシリーズが製作され続けている人気 SF 作品である。両作品の英米社会に対する影響は大きく、多くの先行研究が存在する。敵キャラクターとして登場する『ドクター・フー』の Cybermen と『スタートレック』の Borg については、その造形や描写をもとに、すでに全体主義とファシズムのメタファーであるという論評が定着している。ただ、先行研究の分析では、当時の社会文化背景にまで踏み込んだ考察が足りなかった。小論では、Cybermen と Borg のイメージ形成について、見た目と「住処」、グループマインド、集団信仰、暴力行動という 5 つの方面から改めて考察した。その結果、両者は、いわゆる旧「東側」を除く西洋世界（以下、本稿では単に「西洋」と称する）におけるファシズムあるいは社会主義的なものに対するステレオタイプと偏見によって作られたことを明らかにした。このようなイメージの形成の背後には、20 世紀の複雑な政治的背景、具体的には戦間期の「全体主義は、共産主義の幻滅と否定の合言葉になった」からポスト冷戦までの歴史が影を落としている。

【キーワード】 Cybermen, Borg, 全体主義への恐怖, 社会主義と資本主義, 対立

## はじめに

1963年、イギリスのBBCチャンネルで、宇宙旅行をモチーフとしたSFドラマ『ドクター・フー』(Doctor Who)の放送が開始された。1966年、アメリカのNBCチャンネルでも宇宙旅行のSFドラマ『スタートレック』(Star Trek)も放送開始された。この2つのシリーズ作品は現在も制作が続いており世界的な人気を得ている。両シリーズ作品は、英米の過去数十年来のイデオロギーの流れに関する研究の絶好の研究対象と見なされている。先行研究として、種族と階級、植民地主義、ジェンダー、恐怖、ヒューマニティ、アイデンティティなどのフレームに関する研究が多数ある。

『ドクター・フー』と『スタートレック』の中には多数のエイリアン種族が登場する。なかでも『ドクター・フー』の中のCybermenと『スタートレック』の中のBorgは、それぞれのシリーズに登場した回数が最も多いヒューマンノイドサイボーグの種族であり、人類の最大の強敵である。

『ドクター・フー』のCybermenは、主人公ドクター・フーの古くからのライバルである。『スタートレック』のBorgも、地球を含む惑星連邦に対する最強の敵である。両者の設定には共通点が多く、それは英米社会における全体主義への恐怖のメタファーとして分析されてきた。

Lincoln Geraghty (2008) は、『ドクター・フー』のオリジナルシリーズと新シリーズに登場したCybermenの表現を分析し、ファシズムと全体主義の様式と関連づけ、Borgについても同様に分析し、両者ともハイテクノロジーやファシズム、全体主義への恐怖の表象であると概括した<sup>1</sup>。

ANNE CRANNY-FRANCIS (2009) は、『ドクター・フー』の新シリーズに登場した新Cybermenに加わった特徴——行進中のストンプ(stomp)を手がかりとして、Cybermenの全体主義的とファシズム的な表現を詳しく分析した。新Cybermenのストンプは、グループマインドをもつ軍隊のように行進するCybermenの恐怖を効果的に強調した。ANNE CRANNY-FRANCISは、この点は『スタートレック』のBorgも同じだと指摘した<sup>2</sup>。

Richard Scully (2013) の分析によれば、『ドクター・フー』の主人公ドクター・フーと宿敵Dalekとの戦いは、第二次世界大戦でイギリスがナチズムドイツに勝利した甘美な記憶を何度も繰り返し味わうイギリス人の記憶の表象である。つまりDalekは、ナチズムまたナショナル・ソーシャリズムの象徴であり、この点ではCybermenもDalekと同じだ、とRichard Scullyは述べた<sup>3</sup>。

Vickie L. Edwards (2014) は、Dalek<sup>4</sup>とCybermen, Borgを対象として考察を行い、『スター

<sup>1</sup> Lincoln Geraghty. (2008) *From Balaclavas to Jumpsuits: The Multiple Histories and Identities of "Doctor Who's" Cybermen*. *Atlantis* Vol. 30, No. 1: 85-100.

<sup>2</sup> ANNE CRANNY-FRANCIS, R. (2009) *Why the Cybermen Stomp: Sound in the New "Doctor Who"*. *Mosaic: An Interdisciplinary Critical Journal* Vol. 42, No. 2: 119-134.

<sup>3</sup> Richard Scully. (2013) *Doctor Who and the racial state: Fighting National Socialism across time and space*. In Lindy Orthia (eds.). *DOCTOR WHO AND RACE*. 180-196. UK/USA: Intellect L & D E F A E.

トレック』と『ドクター・フー』における支配と管理、官僚制度の表現を分析し、Dalek と Cybermen, Borg は同様の独裁体制で働き人の自主性と個性を抹殺する恐ろしい存在である、と述べた<sup>5</sup>。

Dan Dinello (2016) は、Borg のイメージが表象する技術の暴力を *Techno-Totalitarian* (技術全体主義) という造語で表し、全体主義への恐怖と、人間の自由と感情の豊かさを賞揚した<sup>6</sup>。

以上のように、先行研究は多様な視点から Cybermen と Borg を考察し、英米社会における全体主義とファシズムへの恐怖を分析し、Cybermen と Borg は人間の自由を脅かす存在だと強調した。残念ながら、先行研究の大半は、単に作品中の Cybermen と Borg の造形と設定に着目し、そこから全体主義的なものへの批判を展開するにとどまっている。Cybermen と Borg のイメージが形成された当時の社会文化背景と、そのイメージの文脈に関する考察が、欠けている。先行研究では、Cybermen と Borg のイメージに対する考察は一面的でリバタリアニズムの色彩が濃厚である。

拙論では Cybermen と Borg のイメージを改めて分析して、それらのイメージが形成された当時の社会文化背景とその文脈まで掘り下げて、考察を進めることとする。

## 1. 反共産主義の合言葉になった「全体主義」

拙論のキーワードの1つは「全体主義への恐怖」であるが、厄介なことに、この「全体主義」という概念は論者によって意味用法が大きく異なる。エンツォ・トラヴェルソ (2010年) によれば、

「全体主義の定義について論じた研究は多くあるが、意味を曖昧にしたまま広く使われてきた。この言葉の中に、〈事実〉(歴史的現実としての全体主義体制)と〈概念〉(古典的な政治思想による分類には収まらない権力形態としての全体主義国家)と〈理論〉(さまざまな全体主義体制に共通する要素から作られた支配的モデル)が混在している。受容の仕方の違いが相互に干渉して絡みあい、使用者によって同じ言葉が意味をかえる。」<sup>7</sup>

1923年の時点ですでに、「全体主義的」という形容詞はイタリアから使われ始めた。自由主義者のジョヴァンニ・アメンドラと、社会主義者のレリオ・パツォ、カトリック司祭のルイジ・ストゥルツォのそれぞれの文献の中で、当初はファシズムに反対する文脈で使われた<sup>8</sup>。その後、「全体主義」の意味用法は段階的に変化した。

---

<sup>4</sup> Dalek はドクター・フーの最も古い敵であるが、本文では Dalek のことを詳しく考察しない。

<sup>5</sup> Vickie L. Edwards. (2014) *Fifty Years of Science Fiction Television Themes of Governance and Bureaucracy in Star Trek and Doctor Who. Administrative Theory & Praxis* 36: 373-397.

<sup>6</sup> Dan Dinello. (2016) *The Borg as Contagious Collectivist Techno-Totalitarian Transhumanists. In Kevin S. Decker and Jason T. Eberl (eds.) The Ultimate Star Trek and Philosophy. 83-93. USA: Wiley-Blackwell.*

<sup>7</sup> エンツォ・トラヴェルソ著、柱本元彦訳、『全体主義』、平凡社、2010年、p.7。

<sup>8</sup> 同7、p.28。

1933年から1947年にかけて、全体主義の概念は、イタリアやドイツから脱出した亡命者の反ファシズム文化のあいだでは、すでに広く普及していた。それと同時に、左翼からスターリニズムへの批判の中でも「全体主義」という概念が現われた。特に1939年の独ソ不可侵条約の締結をきっかけに、ソ連に対する批判や幻滅が広がり、ナチス・ドイツとソ連をならべて「全体主義」とくくる批判が広がった<sup>9</sup>。その後、全体主義は共産主義への幻滅と否定の合言葉になった<sup>10</sup>。その上、1936年から始まったスターリニズム式の大粛清は、ナチス・ドイツとソ連を同類——当時の世界でただ2つの全体主義国家として一緒くたにして批判する根拠とされた。

第2次世界大戦末期の1944年、フリードリヒ・ハイエク<sup>11</sup>著『隷属への道』がイギリスで出版された。ハイエクは、ドイツやイタリアのファシズムのみならず、戦時下の西欧で影響力を増していた計画経済をも、理性の傲慢に基づく、全体主義と同根の思想だとして非難した。彼は、当時彼が住んでいたイギリスを含めて、計画経済を採用している資本主義国家もいずれは独裁へと至る「隷属への道」をたどることになる、と警告した<sup>12</sup>。ハイエクにとっての全体主義とは、自由な社会に反するものを指す。彼は、20世紀の全体主義体制の本来的傾向として、1918年以降ヨーロッパで経済への国家の介入の増加、ドイツの社会民主党のような大衆政党の成立、社会主義とボルシェビズム・国家主義の反個人主義としての登場などを挙げた<sup>13</sup>。しかし、彼の『隷属への道』に対しては、用語の定義が曖昧で、集産主義と計画経済、国家社会主義をしばしば混同して使っているという批判も存在する<sup>14</sup>。

1947年から1968年にかけて、冷戦の勃発とともに、「全体主義」は「自由世界」での反共産主義のスローガンとなった<sup>15</sup>。1946年3月5日に、イギリス首相ウィンストン・チャーチルは、アメリカで「鉄のカーテン演説」をした。演説の中で、チャーチルはソ連と東ヨーロッパの社会主義国家を暴力的独裁国家として批判し<sup>16</sup>、冷戦の幕が開かれた。同年、ギリシャ内戦が始まった。イギリスはギリシャ王室の政府軍を支持し、ギリシャ国内の共産党軍の打倒を企図したが、力不足でアメリカに援助を求めた。1947年3月12日に、当時のアメリカ大統領トルーマンが国内の支持を呼びかけるため、有名なトルーマン主義演説を行った。その演説の中で「……今日、共産主義者が率いる数千人の武装集団のテロ活動によって、ギリシャ国家の存在そのものが脅威にさらされています。……近年、世界の多数の国の国民が、意思に反して全体主義体制を押し付けられました。

<sup>9</sup> 同7, pp.185-186。

<sup>10</sup> 同7, p.70。

<sup>11</sup> オーストリア学派の経済学者・哲学者、20世紀を代表する自由主義の思想家、ノーベル経済学賞受賞者。

<sup>12</sup> 吉野裕介、「アメリカにおけるハイエクの『隷属への道』—思想の受容・普及プロセスからのアプローチ—」、『経済学史研究』, 55(1), 2013年, p.38。

<sup>13</sup> 同7, pp.71-72。

<sup>14</sup> 同12, p.45。

<sup>15</sup> 同7, p.186。

<sup>16</sup> *Winston Churchill The Sinews of Peace, AmericanRhetoric*, <https://www.americanrhetoric.com/speeches/winstonchurchillsinewsofpeace.htm> (2021年9月17日閲覧)

……」<sup>17</sup>のように共産主義を全体主義として批判する言説が目立つ。この演説を機に冷戦が本格化した。その後の5月13日のインタビューで、トルーマンは再び全体主義国家に言及し「全体主義国家は全部同じだ。あなたはそれをどのように呼んでも構わない——ナチス、共産主義あるいはファシズム、フランコ、それともほかに何でもいいが、全部同じものだ。」<sup>18</sup>と述べた。当時のアメリカの対ソのイデオロギー闘争の主な方針は、東側陣営の国々を全体主義国家とひとくくりにして反対することだった。その結果、ファシズム体制と共産主義体制の表面的な類似性が強調されて、両者の本質的な相違点は隠された。本質的にいうと、アメリカ人にとっては、両者の相違点より共通点の方が覚えやすい。しかし1930年代以降、両者の類似の度合いや範囲はずいぶん様変わりしたものの、アメリカ人の全体主義体制に対するイメージは変わっていない<sup>19</sup>。このことはイギリス人においても同様だろう。

1949年、ジョージ・オーウェルは小説『1984年』を発表した。この小説は、乱暴な批難もふくめて無数の批判を浴びたあと、戦後の西洋世界における全体主義体制のイメージの原型となった<sup>20</sup>。アメリカ人の全体主義に対する恐怖が強迫症のようになった頃に、この小説の刊行はアメリカ人の考えとオピニオンの形成に大きな役割を果たした<sup>21</sup>。CIAの官僚たち（『1984年』が彼らの愛読書）は、小説中の全体主義に対する考察に大いに注目した。実際、オーウェルは小説の中で、すべての政権（左右をとわず）が公民に対して権力を濫用することを、強く批判した。CIAの官僚たちはこの意図を無視した。アメリカの宣伝家たちは、オーウェルの考察が共産主義への批判だとすぐに気づいた。ある評論家によると「オーウェルがいったいどういう意図で本を書いたかを一応おいて、彼は冷戦に力強い神話を提供した……20世紀50年代において、これは北大西洋条約機構の決まり文句だ」。そしてCIAは『1984年』の映画製作に出資した。オーウェルの作品は映画製作者たちの偏見と仮説（もちろん文化冷戦の偏見と一致する）を織り交ぜて、巧妙に作り直された<sup>22</sup>。

1951年に、ハンナ・アーレント<sup>23</sup>の著作『全体主義の起源』がニューヨークで刊行された。『全

<sup>17</sup> トルーマン主義, *American Center Japan*, <https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2382/#jplist> (2021年8月12日閲覧)

<sup>18</sup> 筆者訳。原文: There isn't any difference in totalitarian states. I don't care what you call them-you call them Nazi, Communist or Fascist, or Franco, or anything else-they are all alike. 出典: *The President's Special Conference With the Association of Radio News Analysts, Truman library*, <https://www.trumanlibrary.gov/library/public-papers/90/presidents-special-conference-association-radio-news-analysts>. (2021年8月10日閲覧)

<sup>19</sup> *Les K. Adler and Thomas G. Paterson. (1970) Red Fascism: The Merger of Nazi Germany and Soviet Russia in the American Image of Totalitarianism, 1930's-1950's. The American Historical Review vol.75 No.4: 1047-1048.*

<sup>20</sup> 同7, p.94。

<sup>21</sup> 同19, p.1063。

<sup>22</sup> フランシス・ストナー・サンダース著、曹大鵬訳、『文化冷戦と中央情報局』（原題: *Who Paid The Piper?: The CIA And The Cultural Cold War*), 国際文化出版公司, 2002年, p.335。

<sup>23</sup> 日本語文献では「アーレント」と「アレント」の表記が併存している。

『全体主義の起源』は三部構成からなる<sup>24</sup>。アーレントによれば、全体主義は、19世紀のヨーロッパに出現した反ユダヤ主義と帝国主義、植民地主義、人種主義の錯綜のなかで誕生した。彼女が言う「全体主義」の本質的な内容は、ポピュリズムとデマゴグ、外国人恐怖、ユダヤ人排斥などのことだった<sup>25</sup>。彼女はこの本の中で、「全体主義」を用いてナチズムと共産主義（スターリン統治下のソ連）を総括した。しかし、こういう用法それ自体が正当なのかという疑問が出されてきた。このような総括的な概念、つまりソビエト共産主義とナチズムを類似物として捉えること自体が、反共的かつ反ソ的冷戦イデオロギーの反映である、という批判が少なくない。この点は、マルクス主義者からは勿論、リベラル派の人々からもしばしば批判されてきた<sup>26</sup>。しかし、アーレント自身は、「共産主義体制における共産党の一党独裁がただちに全体主義ではないし、ファシズム体制がそのまま全体主義に当てはまるわけでもない。イタリアのファシズムは典型的な全体主義とは異なる（後に全体主義の特徴を帯びるけれども）」と繰り返して強調している<sup>27</sup>。しかしながら1950年代の文化状況にあって、この本は一種の「冷戦の聖書」にされてしまった<sup>28</sup>。

また、同じ50年代では、1956年の『全体主義的絶対権力と独裁制』<sup>29</sup>はアングロサクソンの世界にもっとも大きな影響を与えた本である。エンツォ（2010年）によれば、この本が示した全体主義体制の本質的な図式とは、「第一に、至福千年のヴィジョンに色濃く染まり、社会のあらゆる部分をおおいつくすイデオロギー、第二に、独裁者が君臨するピラミッド構造の唯一の党、第三に、秘密警察による恐怖、第四に、メディアの独占、第五に、さまざまな形式による暴力の独占、最後に、中央による計画経済である。』<sup>30</sup>というものである。

以上、見てきたように、全体主義の定義や、具体的にどのような政治体制・経済体制が全体主義にあたるのか、などについて、歴代の論者の見解はさまざまであり、「全体主義」の意味用法には現在も混沌とした部分が残っている。全体主義について精緻な定義を行おうとすれば、それだけで別に論文を書かねばならないであろう。

全体主義についての研究は重要であるが、拙論の目的は、全体主義に対する再検討と批判ではない。全体主義をめぐる20世紀初頭以来の複雑な社会的・思想的な文脈が、いかに大衆文化に影響を及ぼしたかを再検討することである。その例として、CybermenとBorgという2つのイメージ

---

<sup>24</sup> 第1部は『反ユダヤ主義』で、第2部は『帝国主義』で、第3部は『全体主義』となっている。川崎修（2014年）によれば、第1部、第2部、そして第3部の前半3分の1ぐらいまでは、19世紀に関する叙述が続くことになる。要するに、ナチズムやスターリニズムそのものを扱うのは、第三部の後半三分の二ぐらいだけなのである。

<sup>25</sup> 同7, p.111。

<sup>26</sup> 川崎修, 『ハンナ・アーレント』, 講談社, 2014年, pp.162-163。

<sup>27</sup> 牧野雅彦, 『精読アレント『全体主義の起源』』, 講談社, 2015年, pp.16-17。

<sup>28</sup> 同7, p.115。

<sup>29</sup> 1956年に、ハーヴァード大学の政治学者カール・J・フリードリヒとその弟子ズビグネフ・ブレジンスキが共著して、ニューヨークで刊行された。

<sup>30</sup> 同7, pp.118-119。

に着目する。

Cybermen と Borg に見られる全体主義とナチズムの影については、すでに先行研究において考察と批判が行われてきた。拙論では先行研究と視点を変え、Cybermen と Borg のイメージに投影された社会主義<sup>31</sup> とマルクス主義<sup>32</sup>、共産主義<sup>33</sup> に対する恐怖を考察することとする。

## 2. Cybermen と Borg とは

『ドクター・フー』は、シリーズが放送する現実のイギリスの時代と社会背景の中に、主人公のドクター・フー（惑星ガリフレイ出身の「タイムロード」）と彼/彼女の地球人仲間が、宇宙旅行をしたりタイムトラベルをしたりしながら、様々な宇宙人と戦ったりコミュニケーションしたりして、宇宙の秩序、特に地球の平和を守るために活躍する物語である。敵として繰り返し登場する Cybermen は、地球侵略と人間改造をたくらむ宇宙人の一族で、常に群体として登場する。Cybermen は、『*The Tenth Planet*』（仮訳題：十番目の惑星、1966年）のエピソードで初登場した。1989年の末、オリジナルシリーズの放送は中断された。Cybermen は2005年の放送再開後、2006年から再登場した。故に、このシリーズはオリジナルシリーズと新シリーズに分かれる。Cybermen も2種類ある。オリジナルシリーズ中のモンダス星人（以下、旧 Cybermen と呼び）と、新シリーズ中のパラレルワールドの地球で作られた新 Cybermen（以下は新 Cybermen と呼び）である。

Cybermen というキャラクターを作った脚本家の *Kit Pedler*<sup>34</sup> は、近未来の医学は急速に発展し、人間は四肢のみならず体内の器官も自在に変えられるようになる、という未来像をふまえて Cybermen を生み出した。Cybermen はそのような理念の究極の形である。彼らは自分の体を壊すことを恐れない。金属やプラスチックで体を改造したり修復できるからである<sup>35</sup>。*Kit Pedler* の「外科手術中の予備用品」への恐怖の表象の系譜は、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』まで遡ることができる<sup>36</sup>。ちなみにメアリ・シェリー夫妻は『ドクター・フー』第12シーズン第8

<sup>31</sup> 日本大百科全書によって、社会主義は、社会の富の生産に必要な財産の社会による所有と、労働に基礎を置く公正な社会を実現するという思想として生まれた。その思想の流派には、空想社会主義とマルクス主義、共産主義、国家社会主義などがある。

<sup>32</sup> 科学社会主義ともいう。日本大百科全書によって、マルクス主義はマルクスとその盟友エンゲルスを継承した諸思想・理論・学説およびそれに基づく実践活動をさす。それは、弁証法的唯物論と経済学、社会主義思想という三つの部分によって構成した。

<sup>33</sup> ブリタニカ国際大百科事典によって、共産主義を最も一般的に定義すると、私有財産制を廃止して、全財産を社会全体の共有にしようとする思想または運動であるといつてよい。その流派には、マルクス主義とソ連共産主義、中国共産主義などもある。

<sup>34</sup> イギリスのメディカル科学者と医者、心理学者、兼 SF 作家。1960年代に、*Kit Pedler* は Cybermen が初めて登場するエピソード『十番の惑星』の脚本を書いた。このエピソードの監督は *Derek Martinus* である。

<sup>35</sup> *John Kenneth Muir. (2008) A Critical History of Doctor Who on Television, 132. London: McFarland & Company.*

<sup>36</sup> 同 1, p.89。

話『フランケンシュタインが生まれた夜』（2020年）の中に登場する。この回のあらすじは、メア  
リが『フランケンシュタイン』を書いたのは、ある晩に「1人の Cyberman」が自宅の別荘に侵入  
したことにインスピレーションを得たから、というものである。このエピソードは、ホラーの雰囲気  
気づくりの巧みさと、SF 古典『フランケンシュタイン』へのリスペクトにより視聴者に好評だっ  
た。さて、すでにフランケンシュタインこと「一人の Cyberman」でも十分怖いのに、なぜ Kit  
Pedler は無数の群體たる Cybermen 集団を創作したのだろうか。Kit Pedler およびその後継者た  
ちは、Cybermen の集団的行動による威圧感を強調したかったからである、と筆者考える。

また 1957 年、ソ連が世界初の人工衛星の発射に成功したことを機に、米ソの宇宙開発競争が始  
まった。このような背景のもと、当時の英米ソでは宇宙を舞台にした SF 作品が多数現れた。旧  
Cybermen の設定には、当時の米ソ宇宙開発競争も影響を与えたと言われている<sup>37</sup>。1960 年代のイ  
ギリスでは『1984 年』をふまえ、類似の反共プロパガンダ的な映像作品が多数作られた。『未知空  
間の恐怖/光る眼』（1960 年）や『プリズナー No.6』（1967 年）は日本でも有名である。Cyber-  
men もその代表の例の一つである。アメリカの『スタートレック』オリジナルシリーズにも、ロ  
シア人をモデルとした異星人・クリンゴン人が、宿敵として登場する。

『スタートレック』の物語は、今から百年以上後、科学技術が高度に発展した未来の世界で、地球  
を含む惑星連邦の主人公たちが宇宙艦隊に乗り、連邦の命令で未知の宇宙を旅し、さまざまな宇宙  
人とコミュニケーションをとったり戦ったりしながら、ミッションをクリアし、宇宙と地球の平和  
を守るため活躍する。敵として登場する Borg は、高度な科学技術をもち、他の惑星を侵略してそ  
の文明を奪う悪辣な宇宙人である。Borg も常に群體として登場する。Borg は『無限大の宇宙』  
(1989 年) の回で初登場した。John Kenneth Muir (2008) は、Borg と Cybermen の設定上の相  
似点を列挙した。機械で体を進化させる、他種族の個体を同化する、集団の目標を最優先にする、  
主人公たちと出会うたびに前回より進化している、等の類似点から、Borg の創作者は明らかに Cy-  
bermen からインスピレーションを得ている、と彼は主張した<sup>38</sup>。

1989 年以降のベルリンの壁の崩壊と東西ドイツの統一、ソ連の終焉、ワルシャワ条約の撤廃な  
どの一連の変化につれて、全体主義は新しく議論されて、冷戦に勝利した西側諸国を正当化する道  
具となった<sup>39</sup>。Borg はこの頃に登場した。Borg はクリンゴンに代わって、共産主義的ロシア人の  
象徴となった。

### 3. マルクス主義における平等への歪曲——すべての差異が抹消される Cybermen と Borg

Cybermen や Borg というネーミングの語源について、公式設定では説明がない。筆者の考えに

---

<sup>37</sup> 同 1, p.90。

<sup>38</sup> 同 35。

<sup>39</sup> 同 7, p.186。

よると、サイボーグ (Cyborg)、つまり宇宙空間や深海等の異環境でも活動できるように器官の一部を医学的に人工物に置き換えた生物、が語源であろう<sup>40</sup>。サイボーグという概念の登場は、1960年代の創作全般に大きな影響を与えた。日本の石ノ森章太郎のマンガ作品『サイボーグ 009』<sup>41</sup>の主人公たちはサイボーグだが、それぞれ容姿も性格も個性的である。しかし、西洋の Cybermen と Borg は全員同じような見た目を持つ無個性の群体として設定された。

Cybermen の最初のタイプ——モンドス星人の造形は、1960年代初に NASA が作った宇宙服を参考にした<sup>42</sup>。これは、Cyborg が元々宇宙のような極端な環境の中に活動できるように考案された概念だからかもしれない。NASA 早期の宇宙服には数種類のタイプがある。色も様々であり、表面には様々な帯状のチューブ類がからみあい、胸のところに丸いボタンがついているタイプもある。



図 1



図 2



図 3

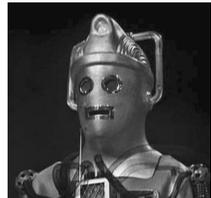


図 4

旧 Cybermen の初登場時、全員の造形は同一で、姿も顔もなんの違いもない。(図 1<sup>43</sup>) 帽子の上に大きなサーチライト状の装置が装着している頭部の様子は、まるで鉱山作業で顔が真っ黒になった鉱山労働者 (図 2<sup>44</sup> と図 3<sup>45</sup>) を思わせる。2回目に登場したエピソード『*The Moonbase*』(仮訳題: 月の基地, 1967年)で、アップグレードした旧 Cybermen は、頭部がさらに鉱山労働者に似てきた。(図 4<sup>46</sup>) 鉱山労働者との類似性は筆者が発見し、ここに初めて指摘する事実である。これについて、創作者である Kit Pedler<sup>47</sup>も、先行研究も、管見の及ぶ限り過去一度も言及していない。その後、旧 Cybermen は何回もアップグレードを重ねたが、この「サーチライト」の特徴はずっと残った。新 Cybermen では「サーチライト」が目立たなくなったが、2020年の最新シリーズ

<sup>40</sup> 『精選版 日本国語大辞典 第二巻』, 小学館, 2006年。

<sup>41</sup> 1964年7月19日の『週刊少年キング』にて連載開始。

<sup>42</sup> 同1, p.90.

<sup>43</sup> 1966 Cybermen Design – Mondassian Cybermen, *THE DOCTOR WHO SITE*, <https://thedoctorwhosite.co.uk/cybermen/cybermen-designs/1-mondas-cybermen/> (2021年9月22日閲覧)

<sup>44</sup> リーズ近郊の産業遺産、地下坑道が見学できる国立炭鉱博物館, ONLINE ジャーニー, <https://www.japanjournals.com/travel/townwalk/10526-coal-mining-museum.html> (2021年9月22日閲覧)

<sup>45</sup> 組図: 六十年代英国矿工生活【7】(訳: 六十年代イギリスの炭鉱夫の生活), 人民網, 2014年10月15日, <http://energy.people.com.cn/n/2014/1015/c71661-25836915-7.html> (2021年8月15日閲覧)

<sup>46</sup> 1967 Cybermen Design, *THE DOCTOR WHO SITE*, <https://thedoctorwhosite.co.uk/cybermen/cybermen-designs/2-moonbase-cybermen/> (2021年9月22日閲覧)

ズの最後のエピソードでは「サーチライト」が光を放ち、存在感を示した。

なぜ未来のハイテク社会の Cybermen の顔に、20 世紀中葉までの炭鉱労働者の面影があるのか。筆者はここに、重要な鍵が隠れていると考える。産業革命以来、イギリスでは、過酷な環境で働く炭鉱労働者は、典型的な労働者階級だった。例えば、西洋のマルクス主義批判の中の言説にも「マルクス主義は終わったのさ。そりゃあマルクス主義は工場や食糧を奪う闘争、炭鉱夫や煙突掃除夫、拡大しつつある貧困、大衆化した労働者階級といったものと、なにか関係があったのかもしれないよ。……」<sup>47</sup>とある。炭鉱夫や煙突掃除夫など、煤で顔が一様になってしまう労働者がマルクス主義の主要な受容者だという発想が読み取れる。

イギリスの国土の石炭埋蔵量は豊かである。イギリスは石炭をいわば「産業のパン」として世界最初の産業革命を達成し、19 世紀までに「世界の工場」としての地位を確立した。その意味で石炭はイギリス工業化のまさに「キーストーン」であった<sup>48</sup>。そして、産業革命を経て、資本主義体制の確立で、イギリスの石炭鉱業も全盛期を迎えた。それにつれて、イギリスの炭鉱労働者の人数も急増した。ダラム州を例にして、その鉱山会社だけでは全盛期で 25 万人ほどの炭鉱労働者を雇っていた<sup>49</sup>。オーウェンの社会主義とチャーティスト運動の影響で、イギリスでは多数の労働組合運動が起こり、社会主義運動が勃発した。人数が膨大な炭鉱労働者たちが運動の主力となった<sup>50</sup>。第二次世界大戦後に、NUM (*National Union of Mineworkers (Great Britain)*), 全国炭鉱労働組合) が成立し、イギリスで最大の労働組合になった。NUM の勢力は、1984 年から 1985 年までのストライキが失敗するまで衰えなかった<sup>51</sup>。このような歴史的な文脈の中で、製作者たちは Cybermen のイメージを通して、科学技術に対するのみならず、労働者、特に社会主義とマルクス主義の影響を受けた労働者に対する恐怖も表象したのではないかと筆者は考える。

新 Cybermen は旧 Cybermen と大いに違う。旧 Cybermen はまだ服を着ているように見える。新 Cybermen は全身が鋼鉄化している。新 Cybermen は、旧 Cybermen の最後の造形をもとにさらにアップグレードして、頭から足まで全部銀色のよろいに身を包んだロボットのように見える。番組の制作費が潤沢になったのか、Cybermen の装備のハイテク感も増している。その上、新 Cybermen は旧 Cybermen の「雫のデザイン」<sup>52</sup>を継承した。私見によれば、一見するとピエロの涙

<sup>47</sup> テリー・イーグルトン著、松本潤一郎訳、『なぜマルクスは正しかったのか』、河出書房新社、2011 年、p.9。

<sup>48</sup> 梶本元信、「南ウェールズ石炭輸出とイギリス海運業の発展、1870-1913 年」、『關西大學経済論集』、39(2)、1989 年、p.350。

<sup>49</sup> *Redhills: An Introduction, Durham Miners' Association*, <https://www.durhamminers.org/redhill>. (2021 年 8 月 25 日閲覧)

<sup>50</sup> 飯田鼎、「1860 年代におけるイギリス労働運動と労使関係：1868 年の「労働組合総評議会」(Trades Union Congress) の成立を中心として [1]：労働組合運動内部の矛盾」、『三田学会雑誌』、62(12)、1969 年、pp.1213-1229。

<sup>51</sup> 山崎勇治、「イギリス炭鉱スト (1984-85 年) とサッチャー政策 —イアン・マクレガー石炭庁総裁とのインタビューを中心として—」、『経済学論叢』、39(1)、1987 年、pp.574-581。

<sup>52</sup> 1968 に放送した『ドクター・フー』の最終回『*The Wheel in Space*』に、旧 Cybermen はこの雫のデザイン

のように見えるこの「雫」は、Cybermen の強いよろいの中に囚われる哀れな元人間の魂の表象である。

Cybermen のデザインと大いに違っているが、『スタートレック』の Borg も全員が同じような見た目となっている。(図 5<sup>53</sup>) Borg は、様々なエイリアン種族からなるが、Cybermen のように極端的に全員を同じ姿と顔にするのではなく、個体の元の姿と顔は部分的に残っている。ただし、露出部分の肌は全部真っ白になっている。Borg の造形は、明らかに『ターミネーター』(1984 年) と『ロボコップ』(1987 年) の影響を受けている。



図 5

以上の考察で、Cybermen と Borg の見た目に最大の共通点がある。それは、両者ともユニフォームティ、つまり制服のように統一的な外見である点である。見た目だけでなく、それぞれの個体の「住処」も全員同じようになっている。「住処」といっても、かろうじて 1 人分の個体が入れる休憩スペースで、狭くて浅い洞窟のような空間である。

旧 Cybermen の「住処」の初登場は『*Tomb of the Cybermen*』(仮訳題:サイバーマンの墓, 1967 年) である。それは何階もあって、各階に均等割りでサッカー場の形をしている穴が並ぶ。全体的にハチの巣状のハニカム構造のように見え、Cybermen はその中に横たわる。一番下の階の真ん中の穴は、Cyber-Controller の「住処」で特別な形をしており、台形である。『*Attack of the Cybermen*』(仮訳題:サイバーマンの襲撃, 1985 年) では、その「住処」は壁の凹みのようになって、ちょうど 1 人の旧 Cybermen が立ったまま入れるぐらいの縦幅になり、均等割りに並んでいる。新シリーズでは、新 Cybermen の「住処」の形は何度も変わった。2006 年の時点では新 Cybermen は立っているままだった。『*ネザースフィア*』(2014 年) では、新 Cybermen が液体で満たされた大きなガラス瓶の中に林立し、まるでホルマリン液で保存される死体のように見えた。『サイバーマンの再興』(2020 年) の新 Cybermen は金属の棺の中に保存されて、また均等割りで並ぶ。旧 Cybermen も新 Cybermen もその「住処」の目的は単なる待機スペースであり、彼らは休憩やエネルギー補給、修復の必要がない。リーダーが命令を下す時にだけ動き始める。

それに対して、Borg の「住処」の形は変わったことがない。その「住処」は、1 人の Borg だけが入れる縦幅となっていて、また均等割りに並ぶ。これは単なるスペースではなく、回復装置となっている。もっとも目立つのは、ちょうど頭の後ろにある大きな円盤状の灯だ。壁の側は全部ハイテクな機械装置となっている。Borg の個体はドローン<sup>54</sup>と呼ばれる。ドローンは、活動すると

---

を使い始まった。そして、1982 年の『*Earth Shock*』から、1989 の放送停止までの間に、雫がなくなった。その雫は、旧 Cybermen の目の穴とつながっていて、目から流し出す涙のように見える。そして、新 Cybermen が登場した時に、その雫のデザインがまた復活した。

<sup>53</sup> *Ex-Borg Hugh's Character Arc in 'Picard' Embodies the Best of 'Star Trek'*, *Newsweek*, <https://www.newsweek.com/star-trek-picard-hugh-death-borg-cube-nepenthe-jonathan-del-arco-xb-1491024> (2021 年 9 月 22 日閲覧)

神経に負担がかかるから、活動が終わったら回復装置に戻り、神経細胞を再生しなければならない。このような生物的な設定は Cybermen と大きく異なる。

ANNE CRANNY-FRANCIS の指摘によると、Borg と Cybermen の無個性性は、フィジカルなユニホームのみならず（この金属殻のスーツがジェンダーや民族のような社会的文化的記号を覆い隠す）、Borg がユニホームを着て完全一致な歩き方をすることでも表現される<sup>55</sup>。制作者たちは、個体のアイデンティティを構成する差異のあるはず物質的なところ——姿と身体特徴、衣装、顔、性別、住処を全部無差別にすることを通して「完全な平等社会」を表現した。ドラマの中では、それは個体が自分で選んだのではなく、独裁体制の下で強制的な手段、暴力と科学技術を通して実現したものである（この手段については後で詳述する）。制作者たちは、元々いい意味で提唱されてきた「平等」という理念を、独裁・暴力・恐怖という暗黒のイメージと結びつけた。それは、「一つの民族、一つの国家、一人の総統」を唱えたナチス・ドイツで、同一の制服、同一の人種というユニフォミティ（図 6<sup>56</sup>）により実現された「平等」と通底するイメージである。その「完全な平等社会」の「住民」たちが全員、昔の炭鉱労働者を想起させる「顔」をしている点に、筆者は注目する。



図 6

松井暁は言う。「社会主義の究極的な理念は平等であるという理解は、一般に受容されているとあってよかろう。まず社会主義の反対者からみると、リバタリアンを代表する F・ハイエクは、社会主義の究極目的について次のように述べている。『社会主義は、ひとえに社会的正義、より大きな平等、安全などの理想——これらは社会主義の究極の目的である——を意味するだろうし、それらを描写するためにしばしば用いられている』。ハイエクによれば、社会主義の方法は計画化または集産主義と呼んだ方が妥当であるが、その究極目的が平等であることは間違いない。……現代の社会主義者も平等を根本目的と位置づける。……このように社会主義の基本理念が平等であることは、その生誕から今日に至るまで、そしてその賛同者、反対者いずれからみても、共通した了解であるようにみえる。』<sup>57</sup>

このような意味での平等は、西洋社会では激しく批判されてきた。例えば「マルクス主義はユートピアの夢だ。それは障害や苦痛や暴力や紛争のない、完璧な社会を信じている。共産主義の下ではどんな敵対関係もわがままも所有欲も競争も不平等もないんだってさ。誰も誰かに対して優位に立ったり劣っていたりしない。誰も労働なんかせず、人間は他の人間との完璧な調和の中で生きて

<sup>54</sup> その時のドローンの意味は現在 21 世紀のドローンと違っている。

<sup>55</sup> 筆者訳。原文：With the Cybers, this loss of distinctiveness is conveyed not only through the physical uniform—the metal casing of the Cyber suit—which hides markers of social and cultural difference such as gender and ethnicity, but also through their uniform marching tread. 出典：同 2, p.128.

<sup>56</sup> 『ヒトラー思想』とは何か—まとめ, 第Ⅲ収容所, <http://3rdkz.net/?p=535> (2021 年 9 月 23 日閲覧)

<sup>57</sup> 松井暁, 『自由主義と社会主義の規範理論—価値理念のマルクスの分析』, 大月書店, 2012 年, p.118.

いて、物質的富の流れに終わりはない。……」<sup>58</sup> このような批判に応じて、マルクス主義者たちが提唱する平等の理想が歪曲され、多数のディストピア作品に表現されてきた。Cybermen と Borg もこの西洋でのマルクス主義への歪曲の伝統にそって作られたイメージである。これは、炭鉱労働者が初期の空想社会主義理想を追求する主な労働者という歴史的な文脈を示唆したのみならず、西洋における社会主義者あるいはマルクス主義者に対する諷刺的な態度も見出した。

#### 4. 独裁政体として描かれる計画経済政体——グループマインドで動く Cybermen と Borg

Cybermen と Borg は設定においても一つの共通点は、両者の世界とも独裁的なグループマインドで動かすことだ。

Cybermen のエピソードの中に、つねに違うリーダーが登場する。Cyber-Leader は、Cybermen の社会の最も低レベルのリーダーだ。他にレベルが高いリーダーも存在する。Cyber-Controller と Cyber-Planner。Cyber-Controller は、必ず頭部の造形が一般の個体とは違う。Cyber-Leader も Cyber-Controller も Cyber-Planner の意思に従って行動する。Cyber-Planner の初出は『*The Wheel in Space*』（仮訳題：スペース中の輪、1968年）である。Cyber-Planner は大きな卵状のコアを持つ人工知能で、移動できず、Cybermen によって隠匿され、Cybermen の作戦と戦略を策定する主体である。Cyber-Planner は、計画と戦略を作るため有機体の思想全体とリンクしそれらの知識を使うことができる他、多様なメディアからも大量のデータを集められる<sup>59</sup>。『*The Invasion*』（仮訳題：侵略、1968年）で、Cyber-Planner は再登場したが、コアは球体になっていた。『銀色の悪夢』（2013年）では Cyber-Planner がドクター・フーの脳内に侵入し、ドクター・フーの姿になって現れた。『フランケンシュタインが生まれた夜』（2020年）では、Cyber-Planner のアップグレード版とも言うべき Cyberiam が登場した。これは、スーパーコンピューターのような存在で、すべての Cybermen の知識と未来の歴史を保存している。Cyberiam は一握の水銀のような不定形をしていて、自分の意志で移動し賢い人に寄生することができる。さらに、Cyberiam は周りの存在の知覚能力を攪乱することもできる。Cyber-Planner および Cyberiam は Cybermen の中で唯一の自主性を持つ存在である。Cyber-Planner はグループマインドを通して、Cybermen の全員の思想をコントロールし、個体ではなく Cybermen という種族全体の目標を最優先に置く。

ANNE CRANNY-FRANCIS は「Cybermen のグループマインドは、つねに SF 作品の中に、個人の主体性とテクノロジーの関係を問うという共通のテーマによく使われる。そして、このような集合体の構造は冷戦 SF 作品の伝統である。冷戦時代における西洋のナラティブの中に、反資本主義政体——たとえば毛沢東時代の中国とソ連（実際、マルクス主義と社会主義、共産主義の方がよ

<sup>58</sup> 同 47, p.68。

<sup>59</sup> BBC ではこの頃のビデオソースが不完全になった。ここでの主な内容はファンサイトで見つかった。Cyber-Planner, TADIS DATA CORE, <https://tardis.fandom.com/wiki/Cyber-Planner>. (2021年8月30日閲覧)

り強調される)と資本主義政体の違いを個人主義と集団主義の違いとして描かれた。エヴゲーニイ・ザミャーチンの『われら』(1924年)とジョージ・オーウェルの『1984年』(1949年)などのようなディストピア作品も同じような構造を扱った。これらのテキストの中に、ヒューマニティは感情を感じるおよび伝える能力と同一視している。<sup>60</sup>と述べた。この後、ANNE CRANNY-FRANCISはBorgも同系の構造をもつもう一つの存在だと指摘した。

Borgの支配者はボグ女王であるが、ボグ女王の誕生と選出は全て謎だ。今までのエピソード<sup>61</sup>の中で登場したボグ女王は2人だけだ。それぞれ2人の異なる女優が演じたので2人と思われるが、劇中の設定では同一の女王であるのか否かについてはオフィシャルの説明はない。ボグ女王の姿は、頭部から肩までだけが有機体で、機械の脊椎がこの有機的部分とつながり、胸から下は全部機械となっている。この2つの部分は常に離れているが、女王が望む時は合体する。ボグ女王は、Borgの中に自意識を持って、Cyber-Plannerのように作戦計画と戦略を策定して命令を下す存在である。この女王は自身を「私(I)」と称する唯一の存在であり、自分について以下のようなセリフで説明する。

「私は、はじまりでおわり、全体の個体。私はボグである<sup>62</sup>。(I am the beginning, the end, the one who is many, I am the Borg.)」

「私は集合体<sup>63</sup>そのものである。(I am the collective.)」

「私はカオスに秩序をもたらす。(I bring order to chaos.)」(『新スタートレック：ファースト・コンタクト』, 1996年<sup>64</sup>)

ボグ女王は、Borgのグループマインドの中心にいる管理者であり支配者である。女王はグループマインドにリンクし、各ドローンの目を通して外界を見る。また、それぞれのBorgがまだBorg

---

<sup>60</sup> 筆者訳。原文：This construction of the Cybers as a group entity is in the tradition of Cold War science fiction. During the Cold War, Western narratives conventionally depicted the difference between capitalism and anti-capitalist regimes such as Chinese Maoism and Soviet state socialism (and between capitalism and Marxism, socialism, and communism more generally) as the difference between individualism and collectivism. 出典：同2, pp.128-129.

<sup>61</sup> 『新スタートレック：ファースト・コンタクト』(1996年)と『スタートレック：ヴォイジャー』の第5シーズン第15話(1999年)。

<sup>62</sup> 本稿では、アマゾンで配信する『新スタートレック：ファースト・コンタクト』(字幕版)の日本語訳を採用した。特に、「*the one who is many*」の翻訳については、アマゾン版の中に「全体の個体」と訳されたが、ちょっと意味不明だ。それに対して、「*the one who is many*」は映画『ゴジラ・キング・オブ・モンスターズ』の中にも出たが、「一つにして無数」と訳された。

<sup>63</sup> ボグの社会と生活する宇宙船、宇宙ステーション、女王、ドローンのすべてが集合体(collective)と名乗られた。

<sup>64</sup> このシリーズ映画の中に、データ少佐がボグに捕まえられた後に、ボグ女王にボグのヒエラルキー構造を聞いた後に、女王はこれらのセリフで答えた。

になる前の記憶と知識もまた、グループマインドを通して Borg の全員に共有される。ボグ女王のみならず、各ドローンも超人的な記憶能力と膨大な知識量を持っているということだ。そして、女王は Cyber-Planner と同様、グループマインドを通して各ドロンの思考をコントロールし、ドロンの個体ではなく集合体の目標を常に最優先する。

Dan Dinello は「Borg は排他的に自分たちの独裁的な完璧主義に集中し、平等とデモクラシー、自由、他人への尊重にまったく関心がない。Borg の単一脳——集合意識はこの断固たる誇大妄想の源である——その集合意識で個人的考えや疑いなどは許さない。……文字通りの単一脳社会として、Borg は究極な全体主義国家だ。……グループマインドあるいは集合的文明は、惑星連邦が象徴すると推奨するリベラルヒューマニティの価値観とまったく正反対となっている。『浮遊機械都市ボグ・前編』（1990年）の中で、捕われたピカードは同化される前に、『われらの文化は自由と自主決定を基づくものである』と強く宣言した。……このような集合的な体制かつイデオロギーは惑星連邦に対する脅威である。』<sup>65</sup>と述べた。この Borg に対する批判は、ANNE CRAN-*NY-FRANCIS* が指摘した冷戦 SF 作品における西洋のナラティブの伝統の延長線上に位置づけられる。

以上のように、Cyber-Planner とボグ女王は、どちらも全体主義的な集合体における支配者ないし管理者、計画者として描かれる。Cyber-Planner とボグ女王は、グループマインドを通して、個体の思想と考えを統制したり支配したりして、種族とかかわる物事のどちらを最優先にするか、集団の利益に対して何が最も価値があるか、集団の利益のため誰を犠牲にするか、などの問題を解決するため非情な統制も辞さない。このような社会構造は、西洋社会における社会主義への批判の中で、計画経済を単純化したイメージであると思われる。それはハイエクが語った、「人々があらゆる目的を追求する際の様々な手段を統制することになり、それを通じて、どの目的が達成されるべきで、どの目的がそうでないのかを、決定しなければならない。……そして手段の独裁的な統制権を握る者は、どの目的が達成されるべきか、どういった価値が高いか低いかを決定することになる。結局のところ、その者は、人々が信奉し、何に向けて努力すべきかをも決定するのである。……われわれの根本的な必要から家族や友人との関係に到るまで、また、仕事のありようから余暇の使い方にも到るまで、計画者の『意図的な統制』が及ばないような領域は、ほとんど存在しなくなるだろう」<sup>66</sup>というような存在である。したがって、Cyber-Planner とボグ女王は、ハイエクが

---

<sup>65</sup> 筆者訳。原文：Focused exclusively on their tyrannical perfectionism, the Borg care nothing about equality, democracy, freedom, or respect for others. Their single-minded megalomania derives from their single mind—a collective consciousness that permits no individual thought, no debate.……As a society of literally one mind, the Borg is the ultimate totalitarian state.……A group mind or collective civilization is diametrically opposed to the values of liberal humanism represented and promoted by the Federation. “My culture is based on freedom and self-determination,” Picard declares emphatically to his Borg captors in “The Best of Both Worlds, Part I” (*TNG*). 出典：同 6, pp.90-91.

<sup>66</sup> F・A・ハイエク著、西山千明訳、『隷属への道』、春秋社、2008年、pp.116-117.

『隷属への道』の中で批判した「計画者」の表象として理解することができる。

花崎（2015年）によって、ハイエクは、社会主義という概念が、その究極の目標である「理想」を意味したり、その理想を実現するための「計画経済」という「方法」を意味したりするなどの混乱があるとして、その「方法」を言い表すためには「集産主義」の一種として社会主義を位置づけることが有用であると指摘している<sup>67</sup>。ハイエクの考えによれば、社会主義者は「結果的に大きな強制をもたらすことで、人びとを共通の計画に従わせるほかはないと考えている。さらにこうした権力の集中は、さらなる計画を実行させるための少数もしくは単一の権力を生み出す。かくして、独裁者が誕生する」<sup>68</sup>。こうなると、「個人の自主独立性や自立の精神、あるいは個人的なイニシアティブやそれぞれの地域社会への責任感、様々な問題をうまく解決しうる個人の自発的な活動に対する信頼、隣人に対する不干渉、普通と異なっていたり風変わりな人々に対する寛容、習慣や伝統に対する尊敬、権力や政府当局への健全な猜疑心など」のような「英国人の偉大な道徳」が、集産主義の発展によって破壊される恐れがある、とハイエクは警告した<sup>69</sup>。

このようなハイエクの主張と対照すると、CybermenとBorgの製作者たちも、CybermenとBorgが表象する全体主義とファシズムを批判する研究者たちも、ハイエクの理論のパターンと一致している。つまり、Cyber-Plannerとボーグ女王が計画主義者の比喩であるなら、グループマインドという構造は計画経済ないし集産主義の比喩である。

## 5. 暴力革命への恐怖——「アップグレード」と「完璧」の名目で他人を同化する Cybermen と Borg

旧 cybermen と新 cybermen では起源が異なるため、それぞれの最大の目標も違っている。旧 Cybermen は、元々は太陽系第10番惑星モンダスに住む人類であったが、病気のため絶滅の危機に瀕し、科学力を駆使して金属とプラスチックの代替品で肉体を改造して延命した。Cybermenにはまだ有機体である脳が残っているが、感情のように人間の「弱み」とされる要素は手術で除去されている<sup>70</sup>。改造されたモンダス星人は、種族の再生産能力、つまり生殖能力を喪失した。旧 Cybermen の人口の増加につれて、機械がモンダス星人の社会を支配するようになった。さらにモンダス星では資源とエネルギーが枯渇する危機に直面した。サバイバルのため、旧 Cybermen は地球の資源を盗みに来る。このような物語の設定には、当時の米ソ宇宙開発競争も影響を与えたと言

<sup>67</sup> 花崎正晴, 「F.A. Hayek: The Road to Serfdom (隷属への道)」, 『社会科学研究』, 66(2), 2015年, p.66.

<sup>68</sup> 吉野裕介, 「アメリカにおけるハイエクの『隷属への道』—思想の受容・普及プロセスからのアプローチ—」, 『経済学史研究』, 55(1), 2013年, p.38.

<sup>69</sup> 同 66, pp.295-296.

<sup>70</sup> 筆者訳。原文: ……his people were once human beings themselves. When their lifespans on Mondas began to shorten, scientist devised replacement parts of metal and plastic to extend their lives. The Cybermen possess organic brains, but human “weakness” such as emotions have been surgically removed! 出典: 同 35, p.131.

われている<sup>71</sup>。旧 Cybermen の主要の目標はサバイバルだが、地球人の中で利用価値があると思われる人間についてはこれを強引に同化し、この行動を「アップグレードさせる」と称する。これは「洗脳」の暗喩と思われる。旧 Cybermen は、無感情でロジックだけで動く自分たちの種族と社会の優位性を信じており、抵抗する者は誰であっても容赦なく殺害する。

新 Cybermen の設定は異なる。新 Cybermen の生みの親は、パラレルワールドの中に登場する国際的なハイテク会社「サイバス工業」の所有者ジョン・ルーミック (John Lumic) である。ルーミックは、老化と病気に苦しむ自分を生身の肉体から解放するため、ひいては全人類を不老不死にするために、秘密裏に科学者に資金提供して人体実験を行う。最初はホームレスをさらって、マインドコントロールと Cybermen 作りの人体実験を行った。実験の成功後、新 Cybermen の量産が始まった。平民もセレブ階級も (ただし王室メンバーは除く)、サイバス工業の製品<sup>72</sup>の利用者は全員がマインドコントロールされ、自ら Cybermen 工場に向かった。工場の中には、改造室の個室が生産ラインのようにずらりと並んでいる。新 Cybermen は個室の外に待機し、マインドコントロールされた人も個室の外で並んで次の改造を待つ。個室の中には手術ベッドがある。巨大でおどろおどろしい切除装置が登場する。歯車や手術用ナイフが歯医者のドリルのように人の前にあらわれる。改造手術に伴う苦痛は、Cybermen の体内にある感情抑制装置がスイッチオンされることで抑制される。

以上の描写は、『サイバーマン襲来』(2006年)と『鋼鉄の時代』(2006年)の内容で、新 Cybermen の設定はここで紹介された。この後の Cybermen の話は、単なる「個体数を増やしてアップグレードする→侵略→人間を同化するあるいは殺す→ドクター・フーに滅ぼされる→個体数を増やしてアップグレードする」というサイクルの反復である。実際、旧 Cybermen でも新 Cybermen でも、Cybermen が出るほぼすべての物語がこのパターンを踏襲して作られてきた。「ドクター・フーに滅ぼされる」以外のステップは、Cybermen の暴力的な属性と怖さを強調する役割を果たす。

Cybermen の暴力行為の動機は、新と旧でやや異なる。旧 Cybermen は、自分たち種族のサバイバルのために地球人を殺したり強制的にアップグレードしたりする。新 Cybermen の暴力的行為の動機は全人類のアップグレードであり、こちらも相手の意志を問わず人を殺したりアップグレードしたりする。新旧ともに彼らの暴力行動は、集団あるいは Cybermen という種族の最大の目標達成のためなので、集団の内部では正当化されている。これらの点も、Cybermen はファシズム、特にナチズムの比喩であるとされるゆえんである。

Borg の誕生の経緯や目的は、劇中でも謎に包まれている。Borg の最大の目標および信仰は、自身が完璧に進化すること。彼らのいう完璧さとは、精神と肉体のエンハンスメントを指す。Borg

---

<sup>71</sup> 同 1, p.89。

<sup>72</sup> 『サイバーマン襲来』中に、この製品は耳掛け式のデバイスで、かけている人の脳内に直接ニュースやメッセージなどのデータをダウンロードすることができる。このデバイスは、ジョン・ルーミックが人をマインドコントロールすることが可能にした。

のいう進化は、個人ではなく種族的かつ集団的な進化を指す。この進化は、他のエイリアン種族を同化することを通して実現する、と Borg は信じている。Borg は自己複製（ないし生殖）ができない。この点は Cybermen と同じだ。Borg はすべての種族を同化するのではなく、知識と科学技術が発達した種族を選別してこれを同化する。ボグ女王が、Borg にとって価値のある技術を有すると判断したエイリアン種族を見つけると、相手が惑星であれ宇宙船であれ、ボグ女王はすぐ侵入プランを立て、各ドローンを動員して適切に運用する。目当ての相手が個人の場合は、相手を拉致して Borg の宇宙船に連れ込んで、改造手術を施す。抵抗したり反撃すれば殺される。Borg の人体改造は、ナノプローブの注射である。注射されると、肉体の表面に機械装置が生じる。これは Cybermen のように肉体の全部を除くのではないから、Borg に同化された個体が元に戻ることが可能である（主人公のピカード船長も、一時的に Borg に同化されたが、その後無事に人間に戻った。図 7<sup>73</sup> 参照）。同化した人間の神経は Borg の神経ネットワークに強制的にリンクされ、個人的な記憶や思想、知識、メッセージなど全て自動的に Borg の神経ネットワークにアップロードされ、グループマインドを通してドローン全体に共有される。Borg は、このような形で知識と科学技術をアップグレードすることで、自身も完璧に近づけると信じている。



図 7

以上のような Borg の設定は、攻撃対象と行動の目的、やり方は Cybermen と異なるものの、両者の行動には本質的な類似点がある。それは、暴力を通して、自分たちの考えや信仰などを強制的に他人に押し付け、他人を自分と同化し、高邁な目標を達成しようとする点である。その高邁なる目標は「アップグレード」と「完璧」である。Cybermen の以下のセリフは、彼らの「アップグレード」と「進化」の意味をよく表している。

Cyber-Leader : 「われらはもうアップグレードされた。(We have been upgraded.)」

ドクター・フー : 「何に? (into what?)」

Cyber-Leader : 「人類の次のレベルに。われらは人類 0.2 バージョンだ。(The next level of mankind.

We are human point 2.)」(『サイバーマン襲来』, 2006 年)

上の対話から、新 Cybermen は、自分たちの形態こそが人類のあるべき未来の姿であると信じていることが分かる。これは、まさに決定論的な歴史観である。西洋のナラティブにおいては、決定論的な歴史観への批判は、しばしばマルクス主義の唯物史観への批判と同義である。例えば「マル

<sup>73</sup> *Locutus of Borg, Memory Alpha*, [https://memory-alpha.fandom.com/wiki/Locutus\\_of\\_Borg](https://memory-alpha.fandom.com/wiki/Locutus_of_Borg) (2021 年 9 月 23 日閲覧)

クス主義は一種の決定論だ。それは人間たちをたんなる歴史の手段とみなし、こうして彼らの自由と個人主義を奪いとってしまう。マルクスは歴史というある種の鉄の掟を信じていた。その掟は冷酷無比の力で作用するから、どんな人間だって耐えられる代物じゃない。……」<sup>74</sup>という指摘もある。青井（1956年）によって、モリス・ギンズバーグ<sup>75</sup>も『進歩の観念（*The Idea of Progress*）』（1953年）でマルクス主義の決定論的進歩史観を以下のように批判した。

「マルキストの教説の決定論的解釈は、今やその形式的な帰依者を遙に超えて、深い影響を示している。このことは資本主義と共産主義との間の戦争は不可避であり、経済体制は不可避的に集産主義に向かって動いている。社会主義の何れの形式も、不可避的に文化的、政治的全体主義に導かれねばならぬという見解が広くとられている」。彼は、ヘーゲルの弁証法もマルクスの決定論も何れも自由を否定するものであるとして非難している。<sup>76</sup>

前述のように、Borgは「完璧に進化する」ことを目指して、Borgがほかの種族より完璧に近いと信じている。この「完璧」という語も、西洋のナラティブにおけるマルクス主義批判の常套句である。例えば「マルクス主義はユートピアの夢だ。それは障害や苦痛や暴力や紛争のない、完璧な社会を信じている。……」<sup>77</sup>という言説もそうである。また資本主義陣営では、共産主義政体との対比を説明するために、常に自分たちが「完璧ではない」と強調する。アメリカ大統領トルーマンは1947年3月12日の演説で「完璧な政府などありません。しかし、民主主義の主要な美点の1つは、その欠陥を常に見ることができ、民主主義的な手続きによってそれを指摘し、正すことができる点にあります。ギリシャ政府は完璧ではありません。しかし、昨年の選挙で選ばれた国会議員の85%を代表しています……」<sup>78</sup>云々と述べている。

このような現実世界の言説を見れば、CybermenとBorgが「アップグレード」と「完璧」という名目のもと、他の種族に暴力をふるい強制的「平等」に達するという設定は、社会主義とマルクス主義、共産主義が暴力革命を唱えることへの諷刺だと分かる。暴力革命も、マルクス主義批判の常套句である。例えば「マルクス主義者は暴力的政治活動を提唱している。連中は穏和に少しずつ進む改良といった繊細な物事の進展を拒絶して、革命という血塗れのカオスを選んだ。蜂起を唱える者たちの小集団が決起して国家を転覆させ、大多数にじぶんの意志を押しつけるってわけだ。マルクス主義者と民主主義が敵同士であることを示す感覚の一つがこれだよ。何しろ連中は道徳意識をただのイデオロギーだとしてひどく忌み嫌ってるからね、マルクス主義者はじぶんたちの政治

---

<sup>74</sup> 同 47, p.36。

<sup>75</sup> モリス・ギンズバーグ, Morris Ginsberg, イギリスの社会学者。

<sup>76</sup> 青井厚, 「進歩論考」, 『人文学』, (28), 1956年, p.40。

<sup>77</sup> 同 47, p.68。

<sup>78</sup> 同 17。

が民主に引き起こす大混乱によって特別のトラブルに巻き込まれることはない。目的は手段を正当化する、たとえその過程でどれほど多くの命が失われたとしてもね。』<sup>79</sup> という批判的言説がある。この説は、マルクス主義者をテロリストのように扱い、西洋のリバタリアンが暴力革命に対して抱く恐怖を現している。Cybermen と Borg の暴力行動の設定は、この言説のパターンと一致しており、まさにこの説の表象と言える。つまり、Cybermen（特に新 Cybermen）と Borg は、英米社会におけるマルクス主義的暴力革命への恐怖の表象と解釈できる。

『ドクター・フー』のエピソード『サイバerman襲来』（2006年）で、量産された Cybermen は、ジョン・ルーミックの命令で、セレブ階級のパーティーに突撃する。このエピソードの中で、最高権力者<sup>80</sup>と描かれるイギリスの大統領は、Cybermen たちの人間だったころの身分をルーミックに問う。ルーミックは「彼らはホームレスでみじめなダメ人間だった (*They were homeless and wretched and useless*)」と答えた。ルーミックはホームレスらを「ただで食べ物を配っている」と騙して誘い出し、Cybermen の実験体にしてしまった。ホームレスからの Cybermen は、まさに文字通りの「無産階級」かつ貧困階級である。大統領は Cybermen の暴力行動、いわゆる暴力革命に異論を唱えた。彼は衆人環視のなか、ただちに Cybermen に殺された。現実世界における暴力革命での最高権力者の公開処刑が想起される。

近代西欧史上、初めて国の代表者かつ最高権力者が平民の革命者により公開処刑された事例は、フランス国王ルイ 16 世である。食糧不足に呻吟する民衆が起こしたフランス革命とルイ 16 世の処刑は、当時のヨーロッパ諸国の王室に強烈な不安をもたらした。「持たざる者」が「持てる者」を処刑する暴力革命の脅威に対して、資産階級も危機感を抱いた。その後、ロシア十月革命で家族もろとも殺されたロシア国王ニコライ 2 世は、イギリス王室の親戚だった。十月革命を経て、世界で初めての社会主義国家ソ連が成立した。ロシア革命では、ロシアの王族と貴族、資産階級が革命の対象になって駆除された。ソ連は世界中に社会主義と共産主義のイデオロギーを輸出し、各地の植民地の民族独立運動と無産階級革命運動を支持した。このようなソ連は、王室や貴族、資産階級などの勢力がいまだに強いイギリスにとって、確かに恐るべき存在だった。労働者階級運動の歴史が長いイギリスでは、王室と貴族、資産階級たちは常に、自分たちがルイ 16 世のように処刑されるのではないかと、という不安を抱き続けた。

イギリス以外の資産家も、この不安から自由ではなかった。『ビリオンズ II』（2017年）では、資産家のボイドは違法取引の罪で検察官に起訴され、法廷に立つ。陪審員は全員、金持ちではない一般市民である。検察官は、陪審員に追加質問をした際に、資産家ボイドと陪審員の収入の巨大な格差を強調し、陪審員がこの事実を聞いたあとでも公正な判断ができるかどうかを尋ねた。陪審員

<sup>79</sup> 同 47, p.173。

<sup>80</sup> 周知されているように、イギリスの代表は女王で、最高権力者が首相である。しかし、『ドクター・フー』の中には、危機に落ちる人の中に、虚構の「大統領」のようなキャラクターがイギリスの代表と最高権力者として登場するのが作品の伝統である。

たちはこの格差に驚愕した。ボイドの弁護士は、陪審員の公正を確認するため、以下のように述べた。

弁護士：「金融業界の人間をそう見るなら——証人が被告人に憎しみを抱いているか見極め、公正に判断できますね？ (If that's your view of bankers, then you could probably recognize when a witness has a personal hatred for the defendant and accord him the impartiality he deserves?)」

陪審員：「ええ、その男を見れば誰でも嫌いになるが、私の判断に影響はない。(sure I could. I assume everyone hates this man from first sight. It's not color my opinion.)」

ボイドは弁護士に：「私をルイ 16 世のように処刑する気だ。(These jurors are gonna do me like Louis XVI.)」(『ビリオンズⅡ』<sup>81</sup>, 2017 年)

この対話のあと、ボイドは自分の量刑が重くならないよう、検察官との司法取引を申し出た。このプロットから、21 世紀の今日でも、「持てる者」である資産家は依然として、自分がルイ 16 世と同じ境遇になりかねないという恐怖を抱いていることがわかる。200 年以上も前に、裁く権力を持つと同時に大金持ちを憎む一般市民がルイ 16 世を公開処刑したレジサイドの記憶は、今も資産家を呪縛しているのである。

## 6. 結論

全体主義をめぐる 20 世紀初頭以来の複雑な社会的・思想的な文脈の中で、Cybermen と Borg という 2 つのエイリアン種族が創作された。筆者は、Cybermen と Borg のイメージはこのような複雑な背景のもとで、重層的で複雑になっていることに気づいたが、先行研究の大半では Cybermen と Borg は英米社会における「科学技術と全体主義に対する恐怖の表象」として考察されてきた。つまり、個性や人間的感情を認めないグループマインドに支配され、強制的に他者を同化する Cybermen と Borg は、全体主義的あるいはファシズムの象徴だと断定されてきた。

小論では、上記に加えて、Cybermen と Borg のイメージには社会主義とマルクス主義、共産主義に対するステレオタイプの偏見、批判の表象もあることを発見した。つまり、Cybermen と Borg は、全体主義と社会主義、マルクス主義、共産主義の混合体で、科学技術と全体主義、社会主義、マルクス主義、共産主義への恐怖の集合体である。冷戦期の西側諸国、特に英米の長期的なプロパガンダの中で、東側であるソビエト陣営の国々は全体主義国家であると宣伝されてきた。これは、現在もおプロパガンダとしての全体主義の影響が続いている理由の一つである。つまり、今

---

<sup>81</sup> 2016 年から放送開始のアメリカのドラマである。主にアメリカのウォール街の金融業界のエリートたちがいかに連邦検察官の司法捜査と訴訟合戦をめぐる物語である。作品の主張の中に、つねに市場自由を唱える金融業界のエリートと政府統制および国民に対する平等を唱える連邦検察官の論争がある。本稿では、ネットフリックスで配信した『ビリオンズ』の日本語訳のセリフを抜いた。

の欧米の西側諸国では、ロシア・中国・北朝鮮などの元社会主義国家および社会主義国家に対するイデオロギー的な戦いの方針は、依然として「全体主義との対決」という旧套を踏襲している。

特に『ドクター・フー』は元々子供向けの作品であり、Cybermenのようなメタファーを通じて反共イデオロギーを輸出するという隠れた意図があることは明白である。つまり、イギリスの国民に対して、子供時代から個人主義を賞揚し集団主義の「危険」から遠ざける、という思惑が看取できる。その時代に成長した人々は、21世紀の今も、20世紀の冷戦の経験と記憶を引きずっている。その跡はほかのたくさんの映像作品の中にも見つかることができる。近年では、ロシア人のほか、中国人のキャラクターもそのような敵として登場するようになった。『スペース・フォース』<sup>82</sup> (2020年)はその代表作の一つである。今回は紙数の都合で割愛したが、西洋における資本主義と全体主義の2項対立的な考え方の伝統や、その21世紀における新冷戦の考え方の表象についても今後さらに考察を進め、機会を改めて論じることとしたい。

#### 参考文献

- (1). Les K. Adler and Thomas G. Paterson. (1970) *Red Fascism: The Merger of Nazi Germany and Soviet Russia in the American Image of Totalitarianism, 1930s-1950s. The American Historical Review* vol.75 No.4: 1046-1064.
- (2). Lincoln Geraghty. (2008) *From Balaclavas to Jumpsuits: The Multiple Histories and Identities of "Doctor Who's" Cybermen. Atlantis* Vol.30, No.1: 85-100.
- (3). John Kenneth Muir. (2008) *A Critical History of Doctor Who on Television. London: McFarland & Company.*
- (4). ANNE CRANNY-FRANCIS, R. (2009) *Why the Cybermen Stomp: Sound in the New "Doctor Who". Mosaic: An Interdisciplinary Critical Journal* Vol.42, No.2: 119-134.
- (5). Richard Scully. (2013) *Doctor Who and the racial state: Fighting National Socialism across time and space. In Lindy Orthia (eds.). Doctor Who AND RACE.180-196.UK/USA: Intellect L & D E F A E.*
- (6). Vickie L. Edwards. (2014) *Fifty Years of Science Fiction Television Themes of Governance and Bureaucracy in Star Trek and Doctor Who. Administrative Theory & Praxis* 36: 373-397.
- (7). Dan Dinello. (2016) *The Borg as Contagious Collectivist Techno-Totalitarian Transhumanists. In Kevin S. Decker and Jason T. Eberl (eds.) The Ultimate Star Trek and Philosophy. 83-93. USA: Wiley-Blackwell.*
- (8). 青井厚, 「進歩論考」, 『人文学』, (28), 1956年, pp.29-46.
- (9). 飯田鼎, 「1860年代におけるイギリス労働運動と労使関係: 1868年の「労働組合総評議会」(Trades Union Congress)の成立を中心として [1]: 労働組合運動内部の矛盾」, 『三田学会雑誌』, 62(12), 1969年, pp.1213-1229.
- (10). 山崎勇治, 「イギリス炭鉱スト(1984-85年)とサッチャー政策 —イアン・マクレガー石炭庁総裁とのインタビューを中心として—」, 『経済学論叢』, 39(1), 1987年, pp.573-597.
- (11). 梶本元信, 「南ウェールズ石炭輸出とイギリス海運業の発展, 1870-1913年」, 『關西大學経済論集』, 39(2), 1989年, pp.349-381.
- (12). 『精選版 日本国語大辞典 第二巻』, 小学館, 2006年。

<sup>82</sup> 2020年に、Netflixで配信したアメリカドラマである。アメリカの宇宙軍を誇りに描いたが、その最大の敵はロシアではなく中国となっている。

- (13). F・A・ハイエク著, 西山千明訳, 『隷属への道』, 春秋社, 2008年。
- (14). エンツォ・トラヴェルソ著, 柱本元彦訳, 『全体主義』, 平凡社, 2010年。
- (15). テリー・イーグルトン著, 松本潤一郎訳, 『なぜマルクスは正しかったのか』, 河出書房新社, 2011年。
- (16). 松井暁, 『自由主義と社会主義の規範理論—価値理念のマルクスの分析』, 大月書店, 2012年。
- (17). 吉野裕介, 「アメリカにおけるハイエクの『隷属への道』—思想の受容・普及プロセスからのアプローチ—」, 『経済学史研究』, 55(1), 2013年, pp.36-52。
- (18). 川崎修, 『ハンナ・アーレント』, 講談社, 2014年。
- (19). 牧野雅彦, 『精読アレント『全体主義の起源』』, 講談社, 2015年。
- (20). 花崎正晴, 「F.A. Hayek: The Road to Serfdom (隷属への道)」, 『社会科学研究』, 66(2), 2015年, pp.63-76。
- (21). フランシス・ストナー・サンダース著, 曹大鵬訳, 『文化冷戦与中央情報局』(原題: *Who Paid The Piper?: The CIA And The Cultural Cold War*), 国際文化出版公司, 2002年。
- (22). *Redhills: An Introduction, Durham Miners' Association*, <https://www.durhamminers.org/redhill>. (2021年8月25日閲覧)
- (23). *Cyber-planner, TADIS DATA CORE*, <https://tardis.fandom.com/wiki/Cyber-Planner>. (2021年8月30日閲覧)
- (24). トルーマン主義, *American Center Japan*, <https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2382/#jplist> (2021年8月12日閲覧)
- (25). *Winston Churchill The Sinews of Peace, AmericanRhetoric*, <https://www.americanrhetoric.com/speeches/winstonchurchillsinewsofpeace.htm> (2021年9月17日閲覧)
- (26). *The President's Special Conference With the Association of Radio News Analysts, Truman library*, <https://www.trumanlibrary.gov/library/public-papers/90/presidents-special-conference-association-radio-news-analysts>. (2021年8月10日閲覧)